

「多産多死」という言葉が中小企業の特徴として使われることがある。多くの企業が倒産や廃業で消えていくが、多くの企業が新たに出てくる。全体として見れば、経済全体に占める中小企業の割合は安定的である。

多死ということは当事者には大変なことであるが、経済全体としてはそれなりの意味がある。競争に生き残れなかった企業、新たな価値を生み出せない企業は退出するしかない。しかし多くの企業が退出すれば、そこに新たな企業が参入する余地も生まれるのだ。米国でイノベーションの研究をしている若手の研究



伊藤元重の

ニュースな見方

者から聞いた話だが、日本

なる。

が多く出てくる必要がある

は中小企業ができてから消滅するまでの年限が非常に長いという。日本に比べれば、米国のほうが企業の平均寿命が短い。米国のほうが多産多死であるようだ。

米国の研究によると、一般的に大企業は既存のアイデアをさらに発展させることに集中する傾向があるのに対し、中小企業、特に新

「シユンペーター仮説」というものがある。一般的には大企業よりも中小企業の

「シユンペーター仮説」というものがある。一般的には大企業よりも中小企業の研究でより多くの成果を出

る企業は新しいアイデアを持って参入してくるので、

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

てくるので、

活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

延命よりイノベーションを

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

延命よりイノベーションを

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

延命よりイノベーションを

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

延命よりイノベーションを

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

延命よりイノベーションを

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

米国のほうが、イノベーション活動の方がイノベーションにつながるやすいという。個別の企業レベルで見れば、倒産は多くの悲劇につながる。だからどうしても企業を延命させようとする

延命よりイノベーションを

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

多産多死の中小企業

傾向があるという。パテント(特許)などの資料を使っ

*この記事は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。